

Title	研究機関発ベンチャーの起業家活動
Author(s)	新藤, 晴臣
Citation	大阪大学, 2006, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/46698
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	新藤晴臣
博士の専攻分野の名称	博士(経営学)
学位記番号	第19992号
学位授与年月日	平成18年3月24日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 経済学研究科政策・ビジネス専攻
学位論文名	研究機関発ベンチャーの起業家活動
論文審査委員	(主査) 教授 金井 一頼 (副査) 教授 小林 敏男 教授 浅田 孝幸

論文内容の要旨

本論文は、これまでほとんど体系的な研究がなされていない大学や研究機関におけるベンチャー創造を対象に、独自の分析枠組みを構築して研究機関における起業家活動のメカニズムを明らかにすることを目的として行われた先駆的な実証研究である。本論文は、次の6つの章から構成されている。

第1章のイントロダクションでは、本研究の意義・目的と全体構成について説明を行っている。

第2章の先行研究に関する考察では、広範な関連研究に関する詳細な検討が行われている。まず、研究機関発ベンチャーを「研究機関の技術を基に、起業家・発明家により率いられた革新的な中小企業」と定義し、多様な先行研究の検討から、研究機関における起業家活動の分析において、一般の起業家活動の構成要素に加え、「発明家」、「技術特性」、「知的財産」、「母体研究機関」、「法律・政策」といった新たな構成要素が重要になると論じている。最後に、研究機関発ベンチャーの創造・成長段階について、当該ベンチャーにおいては、一般のベンチャーのフェーズと比較して創業前後の段階が大きく異なり、考察の重要なポイントとなることを示唆している。

第3章の分析フレームでは、本研究で用いる分析手法であるケーススタディーの意義や妥当性の検討とともに、第2章での先行研究の考察を基礎にして、研究機関発ベンチャーの起業家活動を分析するための「起業家」、「起業機会の認識」、「事業コンセプトと計画」、「資源」、「発明家」、「技術特性」、「知的財産」、「母体研究機関」、「法律・政策」といった構成要素からなる独自の分析フレーム（構成要素と要素間の関係）が提示されている。

第4章のケースにおいては、本研究における分析対象として取り上げられた独立行政法人産業技術総合研究所(AIST)とその研究機関発ベンチャーの創出活動および発明者である研究員がベンチャー創造に関わっていくプロセスの2つのケースが詳細に記述されている。本章では、AISTの概要、政策、発展の歴史について説明を行った後、当研究所におけるベンチャー創出活動の具体例として、①グリッド研究センターと㈱ベストシステムズ、②ベンチャー開発戦略研究センターと舟橋研究員、について記述している。

第5章ケーススタディーでは、第3章で提示された分析フレームをもとに第4章のケースが詳細に検討されている。その結果、分析フレームで提示された諸要因の確認とともに、新たな発見事実として、研究機関発ベンチャーの起業家活動では、①研究ネットワークと事業ネットワークが、発明家、起業家を通じて起業家活動に重大な影響を与えていること、②研究ネットワークと事業ネットワークを結ぶ「メタネットワーク」が、産学連携の「場」として重要な役割を果たしていること、③起業機会の探索は、研究側と事業側の両方からのアプローチであり、「探索の王手詰め

の理論」で説明される、という3つの点を提示している。

第6章の結論では、本研究のまとめとして、これまでの分析をもとに、当初提示した分析フレームを改定し、研究ネットワーク、事業ネットワークなどの知見を加えた新たなフレームワークを提示している。そして、最後に、本研究の理論的・実践的含意と今後の課題を明示している。

論文審査の結果の要旨

本研究は、近年我が国においても顕著な現象として注目を集めているが、これまでほとんど体系的な研究が行われていない研究機関発ベンチャー（大学発ベンチャーを含む）を分析対象とし、詳細な実証研究を行った先駆的な研究である。本研究は先行研究の詳細な検討を通じて独自の分析フレームワークを構築し、ケーススタディーによってアカデミックな起業家活動とネットワークとの関係を明らかにするとともに研究と事業とを結ぶ探索の王手詰めの理論という新たな事実発見を行い、研究機関発ベンチャーの研究に対して大きな理論的貢献をしており、博士（経営学）の学位に十分値するものと判断できる。